【不思議時空】はろうぃん　～姫様は悪戯がお好き～

【不思議時空】はろうぃん　～姫様は悪戯がお好き～

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16578655

ヒュンマ

パプニカ王国にハロウィンがあるかはわかりませんが、あると思ってください(笑)相変わらずの不思議時空です。大戦前のみんなが揃っている不思議空間です。

Table of Contents

- 【不思議時空】はろうぃん　～姫様は悪戯がお好き～

【不思議時空】はろうぃん　～姫様は悪戯がお好き～

「ヒュンケル～。ちょっといいかしら？」
　パプニカ王城に与えられた部屋でアバンの書を読み返していたら、扉の外からマァムが声を掛けてくる。
「どうした？」
　彼女にはいつだって扉は開いている。そうは思うが口に出せないままヒュンケルは扉を開く。
　すると、目の前にもふもふの耳。
　ぱちりと瞬きをすると、大きな獣の耳、袖や腹部をビリビリに引き裂かれたかのような丸首のシャツ。太腿の辺りからビリビリに裂けたホワイトキュロット。両手、両脚には獣を模した手袋とブーツ。ぬいぐるみの手と足だけを人間用にしたかのような……
「はっぴーはろうぃーん？」
「……なにかの呪文か？」
　首を傾げながら言うマァムに、ヒュンケルも首を傾げる。
「レオナにね、これをヒュンケルに着させるように頼まれたの」
「断る」
　マァムの手には真っ黒な衣装のようなものがある。
　見ることもなく断れば、マァムは困ったように苦笑う。
「そうよね……えーと、そう言われた時に伝えるようにって言われたの。ええっと、確か『もし断ったら、マァムにだーくさきゅばす？とかくらやみハーピーの格好させるわよ』って言ってたわ」
「……」
　黙るしかない。
　いや、今の格好と似ていると言えば似ているが、姫のことだ。絶対に乳房を強調するに決まっている。
「これからね、ダイとポップ、レオナと一緒に街のお祭りに混ざってくるの。ヒュンケルがいたら楽しいかなって思ったんだけど」
　足下を見て、服を落とさないようにもふもふの手をぽふぽふしな

がらマァムは小さく呟く。
「着る。ちょっと待っていてくれ」
　マァムの腕から服を取り、扉を閉める。
　広げた服は……まるで聖職者。

　◇

「ヒュンケル、似合ってるわ！」
　にこにこと見上げられて、眉をしかめる。
　自分は聖職者という柄ではない。
「本当はね、レオナってばあなたに変な格好をさせようっていろいろ探していたんだけど、城内の女性達に反対されておーそどっくす？な格好にするしかなかったんだって」
　くすくすと笑いながらマァムが微笑む。
「老師みたいな布オバケとかだと、大き過ぎて子供が泣くって」
「……確かにな」
「クロコダインとあなたで、布オバケしたら、とっても面白いと思ったんだけど、その大きさの布がないんですって。残念」
　自分が身に着けているのは、所謂神父や僧侶のものと違う。物語の中の聖職者の衣装だという。全身真っ黒なため、不吉な印象が強い。
　普段はまとめている髪の毛をマァムは下ろしていた。ふわふわな耳が目の先で揺れるのを微笑ましく眺める。
「私、一緒に歩いていると、聖職者ヒュンケルに降伏された狼女みたいね」
　にこにこと笑いながらマァムが「わんわん」と言いながらヒュンケルの周りを身軽に跳ねる。
「マァム」
　彼女の体を左腕で抱き上げる。
「姫達が待っているのだろう」

「え、ええ」
　全力ではないが、緩く走り出す。
　わんわんと言いながらぴょんぴょんと跳ねる彼女は、狼ではなく完全にうさぎだった。豊かな胸部がふるふると震えて大変目にやさし、いや、目に毒だ。
　今日、街に行くというが……あまり跳ねないように目を配るしかない。いや、このまま抱き上げておこう。
　そうしよう。
　ヒュンケルは一人で勝手にそう決めて、姫達がいるという部屋の扉をノックした。

おしまい